

刊行にあたって

「診断」と言われ、読者のみなさんは最初に何を思い浮かべるでしょうか。まず、真っ先に頭に浮かぶのは、「病名（診断名）をつけること」だと思います。成書には、それぞれの病名に対し、必要な診査項目、臨床所見などが明記され、その病名に対する処置方針までが載っています。つまり、病名がつけられれば、自ずと処置を行うことができるのです。したがって、病名や何かしらの分類を用いることが「診断」というようにいわれているわけです。

しかしながら、同じ病名だったとしても、歯の状態や咬合状態、欠損の有無、パラファンクションの存在など口腔内の条件はさまざまであるため、臨床では決まりきった処置方針が立てられないことを、臨床医は日々の診療のなかで感じていることでしょう。多くの歯科医師が「どのように処置を行うか」といつも頭を悩ませ、「診査・診断」という問いに対する答えを求めているのだと思います。この答えがわかればよいのですが、残念ながら、その答えを導き出すのはほぼ不可能でしょう。なぜなら、「患者は一人ひとり違う存在」であるからです。これは、個別対応や多様性といった表現の根幹をなしており、決まりきった処置方針が立てられない理由なのです。このように考えると、診断するにあたって臨床医に必要とされるのは、さまざまな症例に対応できるような柔軟な考え方を身につけることに集約されるのではないのでしょうか。

本書は、編集委員らがいままでに若手の歯科医師の方から受けた質問を中心に、企画、構成をいたしました。読者のみなさんに幅広い見識をもってもらいたいという思いから、執筆者の方々には、「何をどのように考えて診断したのか」という内容を中心にまとめていただいております。そのため、技術論的な要素は大きく省いているので、その点をご理解していただきたいと思います。

そして、掲載されている症例は、それぞれの術者がいままでの経験や知識を最大限に活用しながら「考える臨床」を行った、すばらしいものばかりです。しかしながら、本書に出ている「考え方」がすべてではないことも事実です。前述したように、「患者は一人ひとり違う存在」であるため、患者ごとに考えなければなりません。その際のヒント集として本書を活用していただき、少しでもみなさんの臨床に役立つことを願っております。

2016年3月
編集委員一同